

本文ではインド建築（インド文明ではなく）のクメール化については何らの説明がない。かつて蘭領東インドの建築家は、ジャワの古代建築をインドから伝播したものとして切り捨てたが、モリヴァンは、造形のクメール化をどのように考えていたのだろうか。かたや、西洋古典の近代化についても、彼はどのようにみていたのか、もっと突っ込んだ分析が欲しかった。これは、創作の三段階で示されているような、時系列上の彼のデザインの変化と直結する問題である。彼のデザインが折衷から抽象へと進んだのなら、では彼はモダニズムの出現をどう捉えていたのか。彼の学んだ頃のエコール・デ・ボザールは、まだまだ歴史主義の残り香が強かった可能性が高い。彼のコルビュジェ理解も、当初は皮層的に留まっていたかもしれない。もっとも、ピュアなモダニズムなど、それこそユートピア的なもので、現実にはどこにもありはしない。モリヴァンは、それを体現した人であったといえるだろう。

著者の創出したモリヴァンのイメージは、具体的に豊かなものであった。そのストーリーテリングは、よくデザインされているだけに、別の角度からみたとき、彼の業績はどう評価されるか、その点も気になる。本書でも、比較事例を度々挙げて、その位置付けを示しているが、スリランカやベネズエラの事例は、同時代性を裏書きしてはくれるが、モリヴァンの相対化までは届いていないだろう。南ベトナムのゴー・ヴィエト・トゥやタイのスメート・ジウムサイといった建築家たちとは、モリヴァンは何が違ったのだろうか。そうして、対象の相対化のためには、史料批判がもっと必要である。本人の言に隠された真実を暴く作業は、もっと丁寧に行うべきである。

本書を読んでいると、著者自身がモリヴァンに心酔している様がよく伝わってくる。が、それは、単なる対象への愛に留まらず、対象への自己投影が込められてはいないか、というのは評者の穿った見方だろうか。著者もまた、建築設計と研究を手掛ける多才な人である。対象を描き出すためによくプランニングされている、という意味において、本書は、やはり建築家を書いた本だとは思ふ。そうして、本書は、だからこそ、読者を惹きつけ

るストーリーを持ちえたといえよう。読者は、著者のデザインしたプランに従って歩を進めればよいのだから。今後、著者はどのように自らの行路をデザインしていくのだろうか。著者のさらなる活躍に期待したい。

（大田省一・京都工芸繊維大学デザイン・建築学系）

中辻 享、『焼畑を活かす 土地利用の地理学——ラオス山村の70年』京都大学学術出版会、2025、vi+408p.

焼畑は東南アジアの各国政府によってこれまで森林減少の元凶のひとつであるとされてきた一方で、研究者のコミュニティにおいて焼畑は森林環境に適した農業形態であるという評価がある。本書は、こうした意識の違いの背景に焼畑の定義の違いや焼畑の評価に乖離があるためだとし、こうした乖離がどのように生じているのかを明らかにしようとしている。非常に厚みのあるデータから着実な議論が展開されており、全般にわたって説得力のある内容となっている。ここではまず本書の内容の説明から始めたい。

本書で用いられた方法論は2つに分かれており、これに対応した構成になっている。一つ目は2000年代以降の焼畑民の土地利用を同時代の現地調査から明らかにしようとするものであり、第1部「国家政策の影響とラオス焼畑民の対応」（第3章～第6章）と第2部「焼畑民による家畜飼養」（第7章～第9章）がこれにあたる。もう一つは過去から現在までの焼畑民の土地利用の変遷とそれが森林に与えた影響を1945年以降に撮影された航空写真を用いて明らかにしようとするもので、第3部「長期的な土地利用・土地被覆の変化」（第10章、第11章）がこれにあたる。なお、第12章は本書全体をまとめる総合的な記述となっている。

第1章の序論では、本研究の対象である焼畑が、近年減退しているということについての問題性を扱っている。まず焼畑減退の事実と、それを引き起こす主な要因として森林保護政策、大規模農業開発を進める政策、市場向け活動の展開があげられる。焼畑の減退によっておこる問題として、焼

畑によって提供されてきた安定した生計の喪失、集約的な栽培への転換による植生や土壌の劣化、炭素蓄積量の減少といった環境の悪化があると指摘する。また著者は、焼畑減退の主要因を焼畑抑制政策と市場経済の浸透であるとしており、特に影響のあったものとして1990年代以降の森林保護政策、移住政策、そして市場経済化を促す3つの政策をあげている。本書の目的は「村落レベルの70年間の土地利用・土地被覆の実態分析に基づき、焼畑民がどのように生計を営み、土地利用を实践してきたか、それは森林にどう影響してきたかを明らかにすること」(p. 48)である。これを明らかにするための下位の問題設定として、微環境に基づく土地利用の違い、国家政策への人々の対応、生計と土地利用の世帯差、焼畑と他の生計活動との土地利用上の関わり、家畜飼養の実態解明、村落間の差異、焼畑・焼畑民が森林に与えた影響、現代史の政治的変動の影響があげられており、この後の章で具体的に論じられる。第2章には本書の主な対象地域であるラオス北部ルアンパバーン県シェンヌン郡カン川周辺地域およびルアンパバーン県ウィエンカム郡サムトン村の概況の説明が入る。

続く第3章～第6章は第1部「国家政策の影響とラオス焼畑民の対応」として議論が展開する。第3章では、土地森林分配事業と換金作物栽培が住民の生計と土地利用に与えた影響について論じられる。対象村落では1990年代に商品作物としてハトムギとカジノキが導入されたが焼畑を完全には代替しておらず両者の共存がみられる。この理由としてこれらと陸稲の間で土地利用と労働力の面で競合が少ないことが指摘されている。一方でその栽培規模や参入の程度は貧富の差が影響しており、貧困世帯ほど焼畑依存度が高くなっているため、焼畑として利用可能な土地を制限する土地森林分配事業は貧困の差を拡大し、集約的な焼畑を余儀なくするものであるとして批判が行われる。第4章では、焼畑や換金作物の農業経営規模、コメ収支の分析等から、世帯の差が生じる要因について考察が行われる。対象村落では市場経済の浸透が進んでおり貧富の差が生まれているが、そこには民族間の経済格差が関係していることが指摘

される。幹線道路沿いの低地では、市場経済の浸透が顕著であり、人口圧の増大により焼畑の継続が困難であるのに対し、高地の領域では焼畑が継続されやすくなっている。また収穫物の賃借や先物売が村内の経済格差を拡大する大きな要因になっていることが指摘される。さらに本章では貧困世帯の中には焼畑を営むことができずコメの借り入れ分が生計に重くのしかかる世帯が多くあり、焼畑が有してきたセーフティネットとしての機能が失われている事実が指摘される。第5章では、ラオスの農村開発政策が焼畑民の生計と土地利用にどう影響したかについて、高地村落と低地村落の土地利用の比較から論じられる。高地村落では安定的な焼畑によりコメを確保したうえで、家畜飼養等の市場向けの仕事にも従事し生計が安定している一方で、低地村落では焼畑が困難なためコメの確保が難しく、現金収入につながる活動が芳しくないため、低地への移住世帯は貧困化していることが明らかとなった。一方住民は低地と高地の両方を利用ししのいでいた。著者はこの事実を基に、例えば低地と高地のアクセス改善や村の境界問題への対応等によって住民の生計戦略を支援する開発政策を打つべきであると主張する。第6章では、対象を14カ村に広げ、各村の焼畑の重要性の差異とその要因を村域と人口移動の面から考察している。土地森林分配事業による村域の画定は効力を持ち、村境の争いは無くなった一方で、村内の土地利用については慣習的な制度がいまだ影響力を持つ。これまでは低地への人口の集中が焼畑の実施を困難にしているという大雑把な議論があったが、本研究により、村境をまたがない移動よりも、またぐ移動が土地への実質的な人口圧につながるということが明らかになった。ここから著者は、人口集中の問題は村境とセットで考える必要があると指摘している。

第2部(第7章～第9章)では、焼畑村落における家畜飼養の意義について論じられる。第7章では、家畜飼養のための出作り集落「サナム」に特に着目し、そこでの家畜飼養の実態の報告、類型化、そして問題点について整理が行われる。家畜は食糧としてのみならず祭祀や行事にも利用される重要な資源であり集落周辺で家畜は飼育され

てきたが、1990年代以降から伝染病を回避しつつも、放し飼いのこだわり、世話の労力、餌となるトウモロコシ畑との距離等の関係性からサナムの設置が広がった。これ以外にもウシやスイギュウの管理のしやすさ、狩猟の前線基地としての役割もあり村では広く受け入れられた。一方サナムの設営には困難もあり、管理に多くの労働力が必要となること、ある程度の初期投資が必要なこと、他に人がおらず寂しいということ等も重要な要素となり、設置世帯は限られた。サナムには石灰岩地帯、高地帯、低地帯のものがあり、石灰岩地帯のサナムが家畜飼養には理想的である一方、現実はその他の生計活動とのバランスや前述の障壁によって現在は舎飼いの移行が進んでいると指摘する。第8章では、よりサナムに焦点が当てられる。家畜飼養は生計の中で焼畑に従属するというよりも、焼畑と同程度の価値を有し、サナムは焼畑と家畜飼養の両方を実施するための拠点として機能していることが強調されている。第9章ではウシとスイギュウの飼養実態が報告される。高地は、利用可能な土地が残っていることと餌となる雑草があることから重要である。飼養拠点としてはサナム、放牧小屋、塩やり場があり、柵作りにも多大な労力を要するため、村の土地利用は放牧を前提としたものになっている。若い焼畑休耕地を家畜飼養の場として利用する村落もある一方で、焼畑耕作期間での放牧は土地利用権が重要因子となることも指摘される。一方、歴史的には焼畑と結合してきた家畜飼養も、参入障壁の高さ、労力、飼料の確保、伝染病、畑地の被害等の問題から、現在は負担やリスクが高くなっている。

第3部（第10章～第12章）では、長期的な土地利用と土地被覆の変化について、前章までの知見も交えながら論じられる。第10章では、第二次インドシナ戦争の間の、山地村落への人口の移入、特にモン族の移入が、高地での焼畑によるケシとトウモロコシ栽培を促進し、さらにチガヤ草地の維持で森林の劣化が急速に進み、現在に至るまで植生が回復していないことが明らかにされる。他方第11章では、前章とは対照的に隣接地域における戦争中の山村からの人口流出が森林被覆の増加をもたらしたことを明らかにした。戦後には山村

の人口は回復し焼畑は再度行われ土地利用圧は増加したが、住民による森林の積極的維持も行われ、積極的な焼畑の実施が必ずしも森林減少と結びつくわけではないと指摘する。また、10章と11章から戦争による森林への影響の大きさが浮かび上がり、現在の森林の状態の理解には戦争の影響をよく考慮する必要があると指摘している。第12章では本書の総括が行われる。ここでは7つの点が提示されているが、焼畑農村の住民の活動を制限する政策への批判と、住民の生計戦略の支援に向けた提言が述べられ、特に、住民による有効的な土地利用や家畜飼養への支援や焼畑農村におけるセーフティネットの再考が強調される。また今後の研究をより進めるためには、第二次インドシナ戦争の影響の大きさの再評価、広域における航空写真、衛星画像利用の必要性も課題としてあげられている。

本書では、ラオス北部の焼畑の実態が豊富なデータを基に描かれ、議論が緻密に組み立てられている。本書の論理展開は信頼性が高く、今後の研究の足場になり続ける良書である。まずは、こうした豊富なデータをまとめあげ労作を出版された著者に感謝を申し上げたい。本書において明らかになったことは多いが、章構成に表れているように、焼畑における家畜飼養の実態や、約70年間の長期的な視点から、土地利用・土地被覆の変化を高い精度で明らかにしたことの2点は、特に高い新規性を持つと思われる。またこの2点は、それまでの第1部にある、生計と土地利用に関する詳細なデータとそれに基づく着実なロジックが基盤となっている。また全体を通して、綿密な聞き取り調査と地図の併用により、村域の全体にわたった生計活動の正確な把握が際立つ。アクセスが悪いために把握されてこなかった焼畑村落に特徴的な活動が本書で明らかとなっており、第1部では高地と低地の土地利用の差異の分析から、焼畑を行う住民の柔軟な対応が明らかとなった。第2部では焦点が家畜飼養に移り、これまでほとんど把握されてこなかった実態の解明と類型化に成功した。第3部では長い時間的スケールをとることによって、第二次インドシナ戦争の森林への影響をはっきりと描き出している。この成果は、こ

れまで漠然と行われてきた、森林劣化や減少の議論にくさびを打ち込むものであり、大変興味深い。著者はこれらの結果を元に政策提言も行っており、傾聴に値する。この成果がラオスの人々に届くことを願っている。

本書によって明らかになった様々な成果がある一方で、評者としてはいくつか気になった点もあるので記しておきたい。まず、本研究によって得られた知見の一般性の問題である。本書はルアンパバーン県の村落を対象とした事例を扱っており、例えば高地は「冷たい土地」であり焼畑に適しているという記述がしばしばみられるが、評者の経験では、こうした評価は村によって異なるように思われる。尾根沿いの土地を「熱い土地」、谷沿いの土地を「冷たい土地」とする村があったり、生育する植物によってそれが決まったりする場合もあり、土地への評価は必ずしも一定ではない。またラオス北部一つをとっても、石灰岩地帯を含む土地利用や、自給用および商品用の作物栽培、家畜飼養、水田との関係性は様々である。シェンクアン県やフアパン県ではルアンパバーン県よりも高標高な土地、異なった環境条件でも焼畑は行われている。家畜飼養の比重もルアンパバーン県のものよりも比較にならないほど高い村落も多い。評者としては、もう少し広い範囲における焼畑を基盤とした生計について、著者のビジョンや評価を教えていただきたいかった。

また評者としては、本書が森林のことを扱いながらも、森林植生や環境の情報がやや少なかつたのも気になる点である。本書は基本的には聞き取り調査情報と地図情報の相互参照を行うことによって議論を展開するが、住民の土地の選択や評価には、聞き取り調査によって得られる情報だけではない、潜在的な経験知のようなものも含まれるはずである。こうしたもののより深い理解には、そこにある環境のより多面的な理解が必要なものと思われる。

最後はやはり、本書によって得られた知見を基にした、焼畑研究の今後の展開がやや見えにくいことを指摘したい。本書では確かに厚みのあるデータによって強固なロジックが構築されている。しかし一方で、そこから導き出された、焼畑村落

の土地利用に関する知見や焼畑を内包した社会がどのようなべきかに対する今後のビジョンが個別的なものにとどまっている感があるように思う。焼畑は人類史の中でも歴史の古い農業で、世界中で行われてきた農業である。研究にしても膨大な蓄積がある。評者としては、著者の考える焼畑研究のより大きな地理的、時間的スケールで考えた場合のビジョンがどのようなものであるのか、知りたかった。これについては本書の中でも時々触れられていたもので、今後の展開に期待したい。とはいえ、本書は今後の研究を進めていくうえでの着実な足場を提供している良書であることは間違いない。ラオスで行っている評者としても、ラオス研究者の後輩として着実な成果を拝見し、身の引きしまる思いである。貴重な成果を出版していただき大変ありがとうございました。

(広田 勲・岐阜大学応用生物科学部)

師田史子、『日々賭けをする人々——フィリピン闘鶏と数字くじの意味世界』慶應義塾大学出版会、2025、vii+354+20p.

本書は著者が2022年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文に基づく著書である。実証に裏付けられた手堅さと現場に密着した生き生きとした描写によって、優れた研究成果でありつつ、読みやすく飽きさせない書物となっている。

序章「彩色の精神」において著者はまず、賭博の賭けや遊びに「定型的で無味乾燥な毎日を鮮やかに彩る」「近代合理的な価値から自己を解放する」「彩色の精神」を抽出したいという(p.7)。著者は特定の社会における賭博の捉え方、実践のされ方に着目する。また賭博を社会的機能として捉えるのではなく、賭博者の体験に注目し、劇的な勝負よりも賭け続ける日常を描くことを中心に据える。

本論は、賭博実践の社会背景を描く第Ⅰ部、フィリピンを代表する伝統的な賭博である闘鶏の実践と賭博者の言説を描く第Ⅱ部、フィリピンにおいて日々広範に行われている数字くじの生活におけ